

第60回企画展

# 藍を作り、藍を売る

—阿波の主産業・藍—



令和2年

8月4日**火** ~ 10月25日**日**

徳島県立文書館 2階 展示室

休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)・毎月第3木曜日

展示解説

担当職員によるやさしい解説

8月23日**日**

9月22日**火****祝**

10月16日**金**

いずれも  
13時30分~



文化の森総合公園 徳島県立文書館  
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山  
TEL. 088-668-3700 FAX. 088-668-7199  
<https://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>



# ご あ い さ つ

藍作は、藩政期から明治の半ばまで、阿波徳島の地域経済を支えた主産業であったことは周知のことでしょう。

吉野川中下流域の5郡（名東・名西・麻植・板野・阿波）は「藍作一所」とよばれた地域で、広大な藍作地帯が広がっていました。藩の勤業政策もあって「阿波の藍か、藍の阿波か」と謳われるまでの基幹産業となり、多くの藍商も輩出しました。

藩は、1733（享保18）年には藍方御用場を設けて統制に乗り出します。そして、1766（明和3）年には藍場役所を設置して藍玉取引を徳島市中で行うことにして、翌年には藍場浜で「藍大市」を開きました。阿波の藍は他国産に比べて品質でもすぐれており、全国の藍玉市場を席卷していきました。新町川沿いにならぶ白壁の藍蔵は徳島の街を象徴する景観となりました。

このように阿波徳島の地域経済を支えた藍であるにも関わらず、藍そのものの特質やその生産・流通の具体的な様相は県民の皆さまにはまだ十分に浸透していないのではないのでしょうか。当館ではこれまでも「吉野川と阿波藍」展（平成24年度）で藍の栽培・生産・流通を取り上げたほか、「阿波商人 鹿島屋」展（平成8年度）、「吉野川中下流域の豪農 一藍師 天野家文書より一」展（平成9年度）、「豪商 志摩利右衛門とその時代」展（平成14年度）などにおいて藍商を紹介してきました。そして、今回は「藍を作り、藍を売る 一阿波の主産業・藍一」展を企画しました。

今回の企画展では、「藍の花、見たことあるで?」、「藍ってどんな作物え?」の質問を通して植物としての藍の特徴を説明し、さらに「藍作人はごっついしんどい仕事やったって聞くけどホンマなん?」、「藍の商売ってどんな風に行われとったんえ?」で、その生産から流通・販売について説明します。さらに、「阿波藍の繁栄は、文化にどんな影響を与えたんえ?」で、藍商が地域文化の隆盛に果たした役割について解説しています。今回の企画展は、このような疑問に答えるかたちで展示を構成しています。展示を通して、阿波の主産業であった藍の生産や流通について、そして植物としての藍の特徴について理解を深めていただければ幸いです。

末尾ながら、企画展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただいた徳島県立図書館・石井町教育委員会をはじめとする皆さま、ご協力をいただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

令和2年8月4日

徳島県立文書館長 石尾 和仁





**A** 阿波国は、もともと大消費地である畿内と瀬戸内の海を挟むだけで隣りあった国であり、多くの産物を送り出していました。1445(文安2)年「兵庫北関入船納帳」は、東大寺の関所であった兵庫北関(現在の神戸市付近)に入った船の船籍地や積載品の量を書き上げた帳簿で、室町時代における瀬戸内海の交易の様子を具体的に知ることのできる資料と評価されています。この帳簿によると、阿波の港に籍をもつ船は、南部では材木、北部では米・麦などの穀物、胡麻、アラメ(海藻)、塩のほかに藍を運んでいたことが書かれています。運ばれた藍がどこで、どのように作られたかはわかっていませんが、この時期から、営々と阿波国内で藍が生産されていた可能性は高いといえます。

このように阿波の国で江戸時代以前から藍は作られていましたが、どのような評価を受けていたのでしょうか。1713(正徳3)年に作られた寺島良安編の『和漢三才図会』に「按ずるに、京洛外の産を上とする。摂州(摂津国、現・大阪府)東成郡の産が最も勝れり。阿波・淡路の産これを次ぐ」とあります。京都洛外の東寺あたりで産出される藍は水藍と呼ばれ、水田で栽培される特別なもので、染め色が最も美しいという評価を受けていたようです。一方阿波の藍は陸藍で畑の作物でした。1827(文政10)年佐藤信淵著の『経済要録』によれば、陸藍では阿波が最良で久留米(筑後国、現・福岡県)がこれに次ぐとして、年々洪水がある土地であることが必要と記しています。吉野川(久留米は筑後川)という大河川が頻繁に洪水を起こし、客土が運ばれた阿波の北方という土地柄が、最上質の藍を産んだという評価をしているのです。

①吉野川中下流の氾濫原に広がる平野において、②台風シーズンである8月より前に刈り取りを行うことができる藍を、③海に近く干鰯・<sup>ほしか</sup>粕<sup>しめかす</sup>(魚油を絞った後の鰯)など金肥の導入しやすい場所で、④河内国(現・大阪府)など本綿の産地や京・大坂などの大消費地に高品質の藍を一定以上の量で産出できることが、阿波藍を産業として大きく育てることになりました。

しかし、こうした藍を産業にまで育てたのは、阿波に住む人々でした。江戸時代の藍作の様子を伝える貴重な資料として「藍田灌水之図」があります。この絵には、大原吞舟の名と「天保癸卯冬日(1843(天保14)年)」と書かれており、作者と時期がはっきりしています。さらに、蜂須賀家の墓所である興源寺の住職であった玉潤の賛(絵に添えた文章)があります。この賛によれば、この絵は覚円村(現・石井町)の大磯氏のことを描いています。「大磯家の老人が若いとき、家は貧乏で他人の藍作を手伝って生活をしていた。この絵の中で大きな跳ね釣瓶を使って藍畑に水を入れている若者の一人は老人

その人である。その後老人は苦勞を重ね、一代で現在の白壁の藍寝床が並ぶお屋敷に住む大磯家を築いた。この絵は、大磯家創業の勤苦を伝えるために書かせたものである」創業の苦勞を後世に伝えるために描いたとありますが、これは、何も持たない灌水作業者が藍作によって一代で富を成すという「阿波藍ドリーム」とも呼べるサクセスストーリーのように読めます。

一方で、阿波の主産業である藍作は秘密の多い産業です。農作物として藍を作るための実態を記述した専門書はほとんど見当たりません。さらに、当時において葉藍から藍玉を作るまでの製法について具体的に記述されたものはありません。専売品として、それほど厳しく情報統制が行われていたのです。そうした中で、多くの人々が切磋琢磨して、藍の品種改良を行い、生育法や藍玉製法の改良を続け、藍の品質を上げていったからこそ、阿波の国を支える大きな産業にまで育ったといえるでしょう。

#### 参考文献

宇山孝人「ある作手引草解題」(1993)(農文協『日本農書全集45巻特産1』)



石垣の上に藍寝床が並ぶ屋敷図(「藍田灌水之図」)



藍畑に跳ね釣瓶で水を入れる若者(「藍田灌水之図」)



# Q 藍の花、見たことあるで？

## 植物としての藍

**A** 藍と呼ばれる植物にはさまざまな種類があります。阿波で作られている藍は主に蓼藍たでといい、『原色牧野和漢薬草大図鑑』によると、「蓼科蓼属の一年生草本、花は穂状花序※1に帯紅色の小さな花を密生する」とあります。もともと日本固有の植物ではなく、原産はインドシナ地方南部と考えられ、日本へは古代に中国から渡来したと言われていています。青色色素成分のインディゴを含む植物は蓼藍のほかに、キツネノマゴ科（琉球藍・茶藍）、マメ科（木藍）、アブラナ科（タイセイ、ウォード）などがみられます。

2020年東京オリンピック・パラリンピックの公式エンブレムには、藍色の組市松紋のデザインが採用されました。地味な色の中にも粋な雰囲気を持つ日本の伝統色が再注目されています。藍の染め色は濃淡によりさまざまな呼び名がつけられています。淡い色から、藍白・甕覗かめのぞき・白花色しらはないろ・白藍しらあい・秘色ひせき・空色そらいろ・水浅葱みずあさぎ・錆浅葱さびあさぎ・浅葱あさぎ・浅葱あさぎ・湊鼠みなとねず・藍鼠あいなねず・紺鼠こんねず・錆鼠さびねず・水縹みずはなだ・薄縹うすはなだ・浅縹あさはなだ・新橋色しんはしいろ・縹はなだ・青藍せいらん・深縹ふかいはなだ・薄藍うすあい・花浅葱はなあさぎ・薄花うすはないろ・薄花桜うすはなざくら・花色はないろ・藤納戸ふじなんど・納戸なんど・高麗納戸こうらいなんど・錆鉄御納戸さびてつお・納戸なんど・錆御納戸さびおなんど・御召御納戸おめしおなんど・鉄御納戸てつおなんど・鉄てつ・熨斗目花のしめはないろ・藍あい・濃藍のうあい・藍錆あいさび・紺こん・紺青こんじょう・鉄紺てつこん・紺藍こんあい・藍鉄あいてつ・搗色かちいろ・青搗あおかち・紫紺むらさきこん・茄子紺なすこん・搗返しかちがえ・留紺等々とめこん、その風雅な色名に日本人の持つ繊細な美意識を感じることができま

では、藍は染料だけに使われていたのでしょうか。1872(明治5)年に作成された「藍一覽」には、「藍の用途は、染家の用に供し、又画具に用い、或いは薬剤等に供するもの也」とあります。藍は、糸などの染色用、絵の具用、医薬用、食用(刺身のツマ等)、陶器類の染めつけ用としても活用されていたのです。中国の最古の薬物書と言われる『神農本草経』では、藍実が上品に分類され、「主として体内に入った諸々の毒物を解すことができる。これを久しく服用していると年をとっても頭の毛が白くならず、段々と身の動きが軽くなる」とあります。日本では、醍醐天皇に侍医として仕えた深根輔仁が918(延喜18)年に編纂した薬物辞典『本草和名』に、藍実が和名「阿為乃美」と紹介されています。また、江戸中期に大坂の医師寺島良安が編んだ『和漢三才図会』

には、「藍実ちゆうきは、諸毒を解し虫蚊※2を殺す。五臓六腑を調え関節を通し心力を益し、耳目を明らかにし、毒腫を治療する」「藍葉汁は、百薬の毒及び蜂・蜘蛛・斑蝥・砒霜石等の毒を消す」と紹介され、「試しに1匹の蜘蛛を藍葉汁の中に投入すると、次第に水と化してしま」「首を縊くって急死した者に、藍汁を灌ぐと生きかえる」等とも記されています。徳島藩に招かれ、医師学問所の講主となった小原春造の著書『薬籠本草』には、これらの書物から引用したとみられる藍実の効用が記されています。また、「阿波藍いろはがるた」の読み札に「可愛い赤ちゃん藍染め肌着せればあせも出なくなる」とあったり、藍師の佐藤家には「フグ中毒には、適量の生すくも藍を食べると治る」など、藍作地域には数多くの薬効が口伝されています。

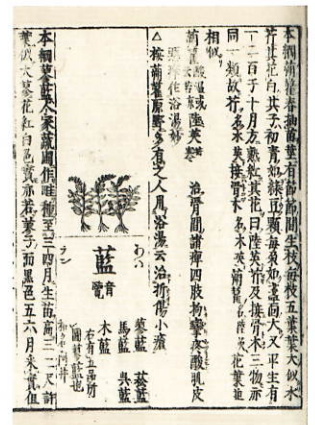
このように先人達は、体験から得た知識を民間薬療法として伝承し続けてきたのです。ただこれらの効果は、現代の医薬・医療に関するエビデンスが乏しいため、疑問視される側面がなくありません。しかし、近年の民間薬有効成分の研究方法の目覚ましい進歩により、今後はその科学的根拠が解明され、藍由来の成分が幅広い方面に応用・開発されていくことが期待されます。

※1 穂状花序(伸長した花軸に柄のない花が穂状につくもの)

※2 虫蚊(音はキ、小児の鬼(神経病か)とあり)



『教草』より藍の花



『和漢三才図会』(94巻・湿草)

藍 <small>あい</small>	甕覗 <small>かめのぞ</small>	空 <small>そら</small>	水 <small>みず</small>	水浅葱 <small>みずあさぎ</small>	浅葱色 <small>あさぎいろ</small>	露草色 <small>つゆくさいろ</small>	縹 <small>はなだ</small>	藍 <small>あい</small>	瑠璃色 <small>るりいろ</small>	紺 <small>こん</small>	搗色 <small>かち</small>	紺 <small>こん</small>	濃 <small>のう</small>	濃 <small>のう</small>
白 <small>しろ</small>	覗 <small>ぞ</small>	色 <small>いろ</small>	色 <small>いろ</small>	葱 <small>あさぎ</small>	色 <small>いろ</small>	色 <small>いろ</small>	色 <small>いろ</small>	色 <small>いろ</small>	色 <small>いろ</small>	青 <small>あお</small>	色 <small>いろ</small>	色 <small>いろ</small>	藍 <small>あい</small>	紺 <small>こん</small>



## Q 藍ってどんな作物え？

### 作物としての藍

**A** 藍の生産過程は、今日残っているさまざまな資料から知ることが出来ます。「藍農工作之風景略図」(石井町教育委員会所蔵)は種蒔きから藍玉に至るまでの生産工程が柔らかいタッチで軽妙に描かれています。これによれば、藍作は毎年2月頃(旧暦)に、苗床を作り、種を蒔くことから始まります。苗が芽を出すと間引き・除草・害虫駆除などの手入れが行われます。害虫駆除は、苗が小さい時は一面に筵を敷き、その上に乗移った害虫を箒で払い捕ったり、たたき落とすなどして行いました。また『阿州北方農業全書』にも「苗床から取ったばかりの苗には虫がよく付くので毎日箒で掃き払うこと」と害虫駆除の方法が記されています。藍に付く害虫としては「ハリマダオシ」・「キラリ」・「ヒョウタンムシ」・「根切りムシ」などが知られますが、殺虫剤などがないこの当時、人力で害虫を駆除するのは大変根気のいる作業であったと思われます。

4月上旬頃、藍の苗が5~6寸(約15~18cm)以上になると移植します。苗は前作の麦の間に2尺5寸(約75cm)間隔で10本ずつ束ねて植え、土を懸け足で踏み固めました。解説には「是は非常に手数を要するので、隣家・同業者・相互ニ手伝ひやい、多数の男女壮年たちわ皆美装を着し此風俗中々美景なり」とあり、村を挙げて作付けを行う様子が紹介されています。

施肥は良い藍を育てるには欠かすことが出来ない大切

な作業であり、干鰯などの金肥が大量に投入されました。施肥は移植作業後に一番肥、それから15日程して二番肥、刈り取った麦の根株が腐った頃に三番肥、半夏生頃(夏至から11日目)に最後の四番肥が施されました。このため、藍作りには多大な干鰯が必要となり、生産コストに占める割合は1789(寛政元)年には42%近くにもなったと記されています(『藍作始終略書』)。しかも、この肥料は商人たちからの前借り資金で購入していたため、藍の不出来は必然的に藍作人の窮乏を招くこととなりました。また施肥とともに、灌水も藍の栽培には欠かせない重要な作業でした。「雨が少ないときには移植した後すぐに畦間に水を入れる」「干ばつになりそうだとわかったら麦を刈り取った後、畦間に1、2度水を入れてやるのがよい」(『阿州北方農業全書』)など灌水の仕方が詳しく述べられています。多くの場合、灌水作業は藍畑にある井戸から「鏡立」と呼ばれる移動式の釣瓶で水をくみ上げて行われました。藍作を描いた絵画にはその光景が数多く登場します。これら害虫駆除・施肥・灌水の一連作業は土用の収穫頃までくりかえし行われましたが、その作業は決して楽な作業ではなかったと思われます。藍作地帯には「藍の種蒔き生えたら間引き、植えりゃ水取り土用刈り」「阿波の北方 起き上がり小法師寝たと思ったらはや起きた」など厳しい藍作労働の歌が残されています。



害虫・キラリ「藍一覽」



駆除・苗取りの図「藍農工作之風景略図」



## Q 藍はどこで作られたんで？

### 栽培地域

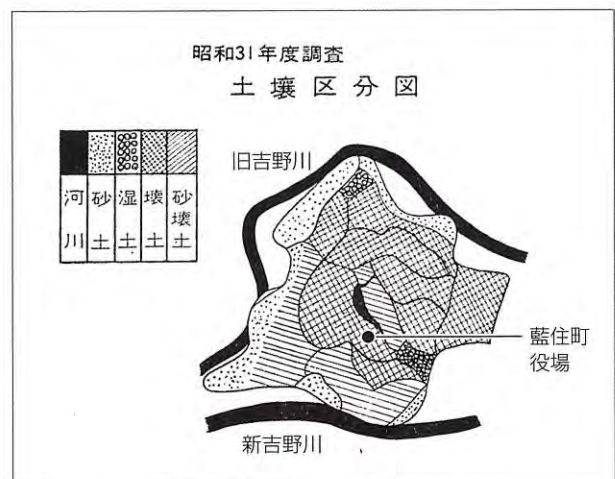
**A** 近世徳島を代表する商品作物である藍の作付けは、江戸時代前半に広まり、作付面積は明暦・万治期（17世紀中期）頃には、吉野川中下流域を中心に数百町歩でしたが、1740（元文5）年ではおよそ3,000町歩に拡大したとされています。作付面積はその後にも拡大し1800（寛政12）年6,502町歩、1818（文政元）年6,725町歩と増大し、1844（天保15）年には8,084町歩と近世最大の作付面積となり、以後幕末まで7,000町歩近くで推移しています。また1740年の「御國中藍作見聞記録」によれば「芳水七郡通計二百参拾七村」（麻植郡29村、名西郡38村、板野郡79村、名東郡52村、阿波郡16村、美馬郡15村、三好郡7村、1村不明）が藍作地帯と記されています。中でも名東郡・名西郡・板野郡にまたがる中島とその周辺の村々は藍作の中心地帯として質量ともに抜きん出た存在でした。

このように藍作が大きく発展した背景には、吉野川の氾濫によって形成された恵まれた沖積層の土壌がありました。作物の生育には、その作物に適した土壌が必要不可欠ですが、藍作地域の土壌は藍にとって最適の土壌でした。『吉野川の育てた農村特産物』によると、吉野川沖積層の代表である藍住は、氾濫によって運び込まれた土砂により形成された、最適の土壌であり、耕土は深く、藍住町の奥野では12mにも及んでいました。またこれら藍作地域の地下水位は5～6mと高く、地下水にも恵まれていたため、井戸を掘り、灌水が行われてきました。さらに度々起こる氾濫は、藍の成長に欠かせない微量要素（植物の生育に欠かせない成分のうち、その必要量がごく微量のもの）を含む土砂を運び込み、連作障害となる有害な成分を洗い流し、土壌に新たな活力を吹き込む重要な役割を担っていました（近年、吉野川河川の氾濫がなくなったため、各種微量要素を人為的に投入し

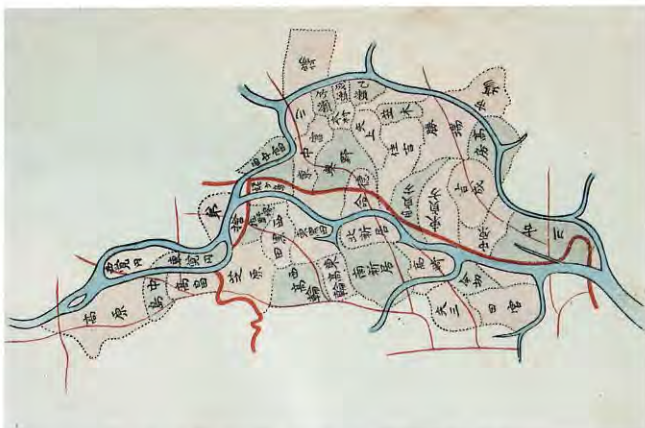
なければ作物が生育しなくなると言われています）。

藍作地帯に行くと、高い石垣で囲まれ、寝床（<sup>すくも</sup>薬をつくる施設）を持つ藍屋敷によく出会います。この建物はこの地の玉師（藍師）たちが、吉野川の氾濫対策の一つとして、知識・経験から築き上げて来たものですが、氾濫の脅威と恩恵を受けながら歩んできた藍作地帯の姿を、今日の私達に語りかける貴重な文化遺産といえます。

しかしその一方で、吉野川中下流域の藍作地帯は治水が十分になされず、灌漑施設が整備されなかったため、米作が出来ず藍作になったともいわれ、氾濫前に収穫を終える藍は最適の作物であったとされています。また藍作は災害がないときには多大な収益をもたらしますが、そのような年は「式拾ヶ年ニ壱ヶ年希ニ御座候」（『藍作始終略書』）と、減多にないと言われています。そこには、自然の猛威に翻弄されながら栽培する藍作の厳しさが指摘されているのです。



「藍住町の土壌区分図」（『藍住町史』）



「中島及近傍村々略図」（『阿波藍治革史』）



氾濫に備え石垣の上に築かれた藍屋敷





河野家文書「覚」

関東干鰯50俵の送り状。徳島の才賀屋基兵衛が田村多次郎・佐藤須賀村源五の2人に販売している。

### A ① 厳しい労働

藍作は、冬の畑起こしから夏の葉藍の刈り取りまで、水やり、施肥、害虫との戦いなどの厳しい作業が間断なく続きます。さらに葉藍の収穫後は、藍粉成しに始まり、薬作り、冬の藍玉搗きに至る藍製造の行程が続きます。藍作地に住む人々は、結局ほぼ一年中藍の製造に関わらざるを得ませんでした。また、藍作地帯の裏作はほぼ晩秋に種を蒔き、5月に刈り取りをする麦でした。麦で払う年貢は夏年貢とされ、二毛作が標準であった阿波国では、藍作地帯も例外ではなかったのです。

### ② 厳しい経営

江戸時代に玉師（藍師）と呼ばれた、家屋に寝床を持ち実際に藍玉の製造を行う藍商たちの資料を見ると、藍玉製造の原料である葉藍は、玉師達が自分のもつ土地で栽培する手作と、近隣から買い集める購入分がありました。玉師達の多くは近隣の土地を買い集めた小作地主でしたので、藍作人達の実態は、中小の自作農と玉師達が支配する小作農でした。

農作物である葉藍の生産は、大きな利益を上げる年もありましたが、災害や社会の経済状態などの理由で厳しい年もありました。葉藍の先売り（引当金）や肥料代の前借りなどによってようやく経営を成り立たせる年もあったのです。

藍作に用いる肥料は、鰯を干した干鰯<sup>ほしか</sup>や、魚から魚油を絞った後の粕<sup>しめかす</sup>が中心で、多くは他地域からお金で購入されるため、金肥と言われました。山田家文書には藍作に使う年間の肥料代金等についての精算書が残っています。前年6月に鰯粕を40俵（代銀2貫250匁）、正月

に関東干鰯25俵（代銀700匁）。5月に鰯粕8俵（代銀446匁弱）を購入し、さらに葉藍10本（重さ156貫弱、代銀1貫396匁弱）を購入し、9月と12月に藍を売ったお金などで精算しています。この文書では、残金11匁弱と収支のバランスを取っているように見えますが、一方で、関東産の干鰯など、金額の高い肥料を大量に購入していることがわかります。こうした収支のバランスは繊細だったようで、木内家文書の「仕渡ス一札之事」によれば、竹瀬村（現・藍住町）の六右衛門は、大坂の商人松屋安兵衛に借りた干鰯代の内、利子も含め銀1貫535匁が返済不能で訴訟となり、4年に分けて返済することで許しを得ています。さらに、山田家文書の「申上覚」（1806（文化3）年）などによれば、川端村（現・板野町）の嘉兵衛は、大坂の今津屋仁兵衛に借りた干鰯代の返済ができず訴訟となり、身代限り（家財等の売却による強制執行）を言い渡されています。藍作に欠かすことのできない肥料の購入は、藍作人達を経済的に縛ることがあったのです。

### ③ 労働と食事

上浦村（現・石井町）の阿部家文書には、1837（天保8）年の法令として、藍作地の村々に触れ出された法令に対する請書（法令を遵守することを約束した書類）が残っています。その法令の内容は、天保の飢饉に際し、藍作人に対して、春の彼岸から秋の彼岸にかけて認めていた1日5回の食事を4回に減らすというものでした。明け方から夜なべ仕事まで、寝る間も惜しんで働き続ける藍作人達には、一日の食事を5回に分けることが一般的なことだったのです。





すくも

## 菜・藍玉って何なん？

## 加工について

**A** 「藍を建てる」「藍建て」という言葉を聞いたことはありますか？ 藍の染料成分（インディゴ）はそのままでは水に溶けないので、水に溶けるようにして染料液を作ることを意味します。伝統的な藍建ての方法（発酵建て）に用いられる染料の菜と藍玉はどのように藍から作られるのでしょうか。

藍は、6月下旬から7月にかけて刈り取ります。刈り取ったその日の内に①細かく刻みます（藍切り）。②その翌朝、刻んだ藍を筥ひしろうに広げて干しながら、③唐竿からざおという道具で打ち、藍をよく擦り（藍すり）、乾燥させるとともに葉と茎に分けます。④箕みでふるうなどしてさらに分別して茎を除いたものが、葉の原料である葉藍となります。この①～④の作業を「藍粉成し」といいます。

できた葉藍を寢床という葉を製造する作業場へ広げ、水を加えて発酵させます（寢せ込み）。それから数日後、全体をまんべんなく発酵させるために熊手でかきまわし（切り返し）、再び水を加えて発酵させていきます。このような作業を約90日間、12～17回ほどくり返し、発酵が終わったものが葉です。この葉に水を加えて臼で搗き固めた（藍搗き）ものが藍玉です。藍搗きは、写真のように大勢の人でいっせいに行われ、時には音頭に合わせて行われました。

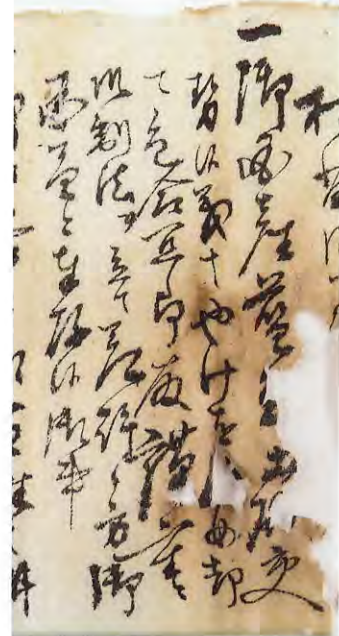


「藍搗図と藍俵」

葉の段階で、染料としては完成しています。輸送の利便性から、昔は藍玉に加工することが多かったのですが、現在は藍玉は作られていません。

ところで、正保期（17世紀中期）から明治中頃までの徳島の藍玉には大きな特徴がありました。それは、「藍砂」という砂が入っていることです。先ほど、藍玉は、葉と水で搗き固めていると説明しましたが、当時はさらに藍砂を混ぜて搗き固めていたのです。その理由は、1668（寛

文8）年に、別宮浦べつくうら（現・徳島市）の庄屋である森当左衛門が書いた「存付申上ル覚」から読み取れます。

「存付申上ル覚」（金塚（森）家文書）  
藍砂について述べている部分

当左衛門はこの文書の中で、藍玉に砂を混ぜることで腐敗を防ぎ（「やけを（藍担）め（止めカ）」）、染色の色合いが良くなる（「色合よろしき宜布」）と述べています。そのため、藍玉を製造する際に砂を混ぜることを許可するよう徳島藩へ申し出ています。つまり、当時は藍砂を混ぜることで輸送中や保存中の腐敗を防ぎ、また染色時の色合いが良くなると考えられていました。

この藍砂は、砂であれば何でもよかったわけではなく、根井・弁天（現・小松島市）で採れる砂が最上品であるとされていました。1772（安永元）年に高島村（現・石井町）組頭庄屋の小川八十左衛門が徳島藩へ提出した藍砂に関する意見書（『藩法集3 徳島藩』）には、根井の砂は、「他所の砂よりも色が青く細かい」と書かれています。そのため「藍玉に入れても目立たない」とも述べており、藍砂にはかさ増しの目的もあったと考えられます。

藍砂を入れはじめてから約240年後の1887（明治20）年、農商務省の技師が分析したところ、藍砂には腐敗を防ぎ、色合いを良くする効果はないとされ、廃止されました。以後、藍砂を藍玉に混ぜることはなくなりました。

## 参考文献

西野嘉右衛門『阿波藍沿革史』（1940年）



# Q 藍の商売ってどんな風に行われとったんえ？

## 藍業について

**A** 藍の一大生産地として全国トップのシェアを占めた阿波国。1940(昭和15)年に発行された『阿波藍沿革史』には、1766(明和3)年から1868(慶応4・明治元)年までの内、10ヶ年分の玉師(藍師)の数を挙げています(下記グラフ参照)。これを見れば、江戸時代中期～幕末を通して1,000～2,000軒近くの玉師が活躍していたことがうかがえます。この中には、阿波国内だけでなく、他国、特に大坂や江戸への販売を行った藍商が存在します。1882(明治15)年に作成された「繁栄見立鏡」は、いわゆる長者番付です。阿波国内の商人の財力を力士に見立て、「大関」「小結」「前頭」とランク分けしています。上位には久次米・三木・志摩などの大藍商の名がズラリと並んでおり、当時、藍業が徳島の経済を大きく牽引していたことを示しています。

藍商は、葉藍を仕入れて葉や藍玉に加工し、染色業者(紺屋)に売るのが仕事です。藍の栽培が盛んだった吉野川中流域に拠点をもつ藍商の中には、葉藍を自作する者もいました。商人自らが鋏を持つこともありました。板野郡東中富(現・藍住町)の大藍商だった犬伏家に残されていた「葉藍手作并買葉俵数メ目付帳」には、その日に加工に回した葉藍のうち、自作分・購入分それぞれの葉藍の量が記されています。1つの商家が農業・製造業・流通販売業を総合的に担うこの形態は、現在で言う6次産業にあたるといえます。

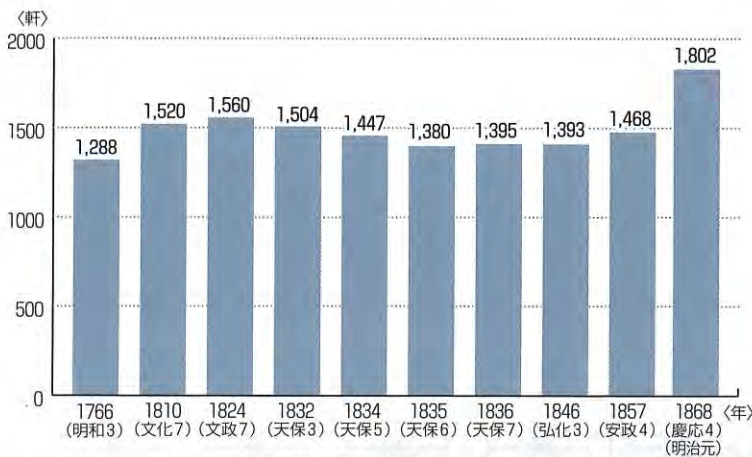
藍の販路は文字通り全国に広がっていました。『阿波藍沿革史』によれば、佐渡島(新潟県)・隠岐(島根県)・宍岐・対馬(ともに長崎県)と離島にまで及んでおり、正に津々浦々まで阿波藍が知られていたことがわかります。販路を開拓した藍商の努力の成果でもあります。他の追随を許さない阿波藍の品質の良さもその要因ではないでしょうか。埼玉県の染め物業者の引き札(明治～昭和初

期)の広告チラシ)には「徳島県阿州物産藍玉を限り使用」と記されており、「阿波藍」が高いブランド力を有していたことがわかります。そのブランド力を維持するため、藍の品質の確認に用いられたのが「手板鑑」です。『阿波近世用語辞典』によれば、「藍玉ひとつまみを餅のようにして紙に押しつけ、その色を見て品質を鑑定する」とあります。実物を見ると、紙一面に整然と丸い形が並んでおり、傍らには藍商の屋号が書き添えられています。経年による変色なのか、藍色というよりも少し緑がかった黒色の印象を受けます。当時は、この紙を陽の光に透かして色を確かめ、善し悪しを鑑定していたそうです。

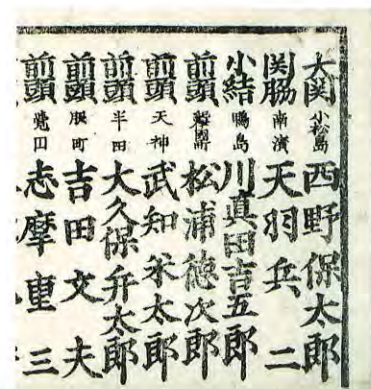
最後に、藍商が遭遇したいくつかのトラブルを紹介します。坂東茂八郎家に残された書簡には、藍玉を売りに行った薩摩国(現・鹿児島県)で、困窮を理由に代金を払ってもらえず「一向に埒明さず」と難局が報告されているものがあります。また、別の書簡には、藍玉を積んだ船が難破したため「藍三十三本塩漬に相成」と書かれています。名西郡高原村(現・石井町)の藍作人元木宇三郎が残した「かどや日記」には「江戸神田佐久間町より出火起、(中略)藍問屋仲間店持十六軒有之所十三軒焼」とあり、大規模火災によって江戸の多くの藍問屋が被害を受けたことがわかります。別の日には「藍商越前(現・福井県)にて殺され、金子百両ほど取られ申候」との記述があり、不運にも盗賊に襲われて命を落とすこともあったようです。



「藍玉しらへ手板」(天野家文書)



玉師の軒数(『阿波藍沿革史』より)



「繁栄見立鏡」(岩村家文書)





# 阿波藍商に対して、徳島藩はどんなバックアップをしたんえ？

阿波国と藍商

**A** 徳島藩は江戸時代前期から藍を重要な国産品として重視し、さまざまな保護と統制を加えてきました。

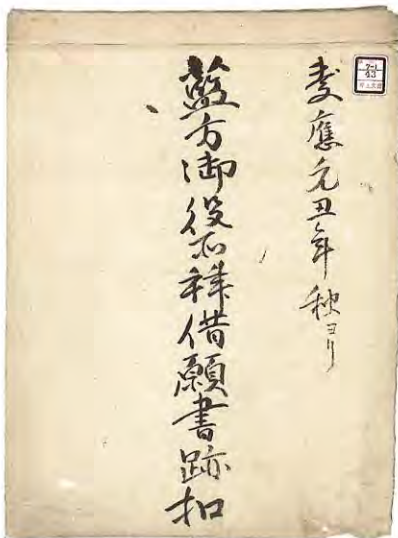
例えば、阿波藍の二大市場となっていたのは大坂と江戸（関東）ですが、流通ルートの主導権を巡って当地の間屋と阿波出身の藍商の間で対立が続いていました。徳島藩は、時には幕府と対立しながらも阿波藍商をバックアップして、市場の主導権を確保していきます。江戸時代も後半になると、阿波国以外の藍（地藍）の生産が伸びて阿波藍の脅威となってきます。このような動きに対抗して、全国に進出していた阿波藍商は藩の主導の下に、他国産藍の排除や仲間同士での過当競争の防止を目的とした「売場株（仲間）」を販売エリアごとに結成していきます。このような売場株は、幕末には30を越えており、各売場株からは藩に対して多額の冥加金（営業税）が上納されています。

徳島藩の藍方役所の実態についてはよくわかっていませんが、小松島の大藍商であった井上家に残されていた「藍方御役所拝借願書跡控」によると、藍商に対して運転資金の融資も行っていったようです。また、藍作地帯の中心部に位置する板野郡竹瀬村（現・藍住町）の藍商で庄屋も務めていた木内家は、越後（現・新潟県）に売場をもっていました。天保の飢饉の時に紺屋からの売掛金の回収に失敗します。同家の手代は幕府の法廷に訴え

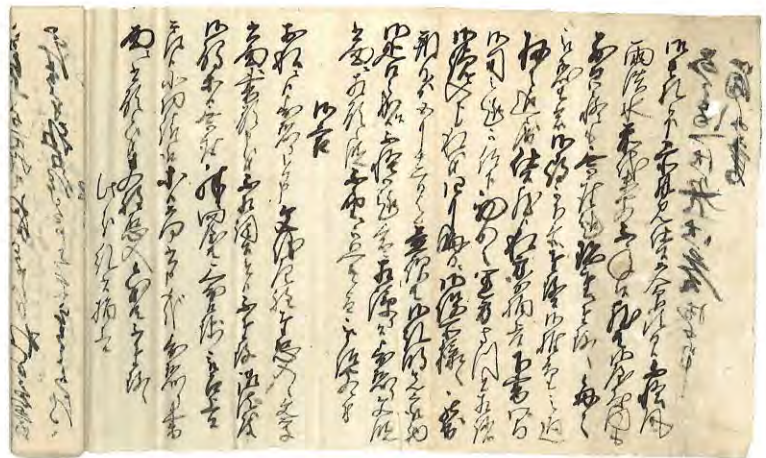
ることにしましたが、旅銀が尽きたために宿屋に泊まられず、徳島藩の江戸藩邸に“そっと”泊めてもらいます。さらに藩邸の役人は、訴訟に必要な書類などさまざまなアドバイスもしています。これらはあまり知られていない藩のバックアップ策のひとつと言えるでしょう。

江戸時代中期以降、財政的に苦しくなっていた徳島藩は領内の富裕者に対して冥加金や御用金（藩の借金）、身居（身分）の上昇を条件とした献金などを求めています。藍商たちが藩の保護を受けながら得た富の一部は、このような形で藩に吸い上げられていったのです。このように、藩と藍商の間には一種の共生関係が成立していききました。

明和期（18世紀中期）の藍政改革を提起した小川八十左衛門、天保期（19世紀中期）の藩財政改革を主導した志摩利右衛門、明治維新时期に活躍した井上三千太など、藩政に大きな影響を及ぼした大藍商たちが何人かいます。その一方で、文化年間（19世紀初め）に木内家の当主であった浅五郎のように、「藩の肥料（干鰯）統制策は藍作人の不利益となる。地藍伸張という危機的状況の中だからもっと生産者に寄り添った政策をとって欲しい」と堂々と藩の政策に異を唱え、役所に呼び出されて12日間にわたって糾明されながらも節を曲げなかった藍商もいます（木内家文書「正遭御答御答箇条書」）。



「藍方御役所拝借願書跡控」（井上家文書）



「正遭御答御答箇条書」（木内家文書）



# Q 阿波藍の繁栄は、文化にどんな影響を与えたんえ？

藍商の文化貢献

**A** 江戸時代後期の阿波を代表する大藍商で、天保の藩政改革でも活躍した志摩利右衛門は文化人としても知られていました。彼は「藍田灌水之図」の作者である大原呑舟などの画家や、江戸・京都の俳諧の宗匠、そして頼山陽一家などとも深い親交があり、自身も多くの俳諧などを残しています。利右衛門のように藍商の中には豊かな経済力を背景に、自らが創作者として、また芸術家のパトロンとして阿波国の文化に影響を与えていった者が少なくありません。

藍の移出によって流れ込んできた膨大な金銀が領国経済を刺激したこともあって、江戸時代中期以降の阿波には民衆文化の花が咲き誇りました。この時代の阿波の民衆文化を語る際に必ずといって良いほど取り上げられるのが、名西郡高原村（現・石井町）在住の裕福な藍作人であった元木宇三郎・林兵衛父子が書き残した「かどや日記」です。そこには1811(文化8)年から1857(安政4)年の間に徳島城下及び藍作地帯である吉野川中下流域の村々などで開催された、約250の各種興行に関する記述があります。徳島城下の場合、興行のメッカとなっていたのは寺社が軒を連ねる佐古から寺町、二軒屋へと続く眉山山麓一帯で、浄瑠璃・相撲・軽業・珍しい動物や精巧な細工の見世物などが盛んに行われていました。

一方、郷分では藩の方針もあって浄瑠璃が興行の中心

となっていました。板野郡竹瀬村（現・藍住町）の場合、庄屋を務めた木内家の「御用控」からは「八幡宮修復費用捻出」「八幡宮開帳賑」「悪病流行立願解」「地神（徳島藩独自の五角形の神塔）祭」などを名目とした浄瑠璃興行が盛んに行われ、許可は下りなかったものの、軽業興行まで企画されていたことがわかります。郷分においても会場は寺社の境内地が中心ですが、藍商などの庭先での興行も行われていました。また、地元の藍商などが「元方」として興行に携わっていたと考えられる資料も残されています。

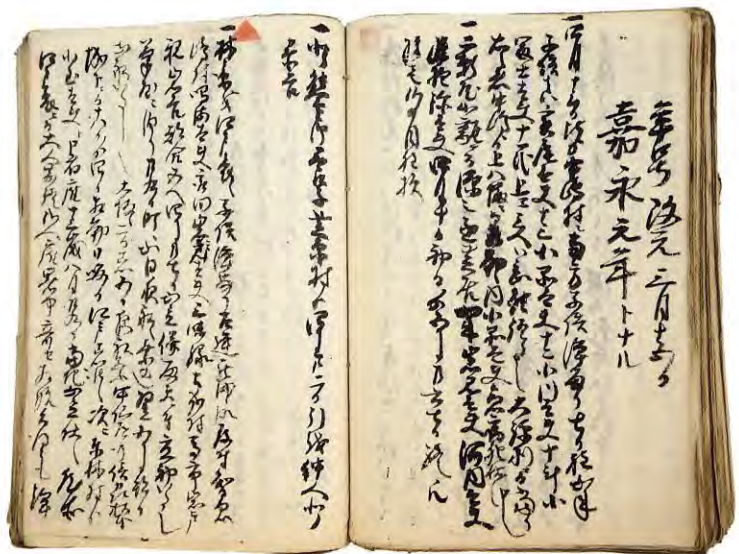
「かどや日記」を残した元木家の物領息子林兵衛は、単なるタニマチや勧進元であることに飽き足らなかったのか、1848(嘉永元)年に浄瑠璃の子供太夫と三味線奏者を雇って素浄瑠璃（人形・演技者を伴わない浄瑠璃）の一座を結成し、信州松本（現・長野県）や江戸での興行に乗り込みます。林兵衛のような例がどこまで一般化できるかは不明ですが、当時の藍作地帯の「雰囲気」を物語っているのではないのでしょうか。

「かどや日記」等からは、セミプロ級の実力を有し、時にはプロとアマの垣根を跳びこえてしまう「素人」と、タニマチあるいは勧進元として彼らを支えていた藍商などの富裕層が分厚く存在していたことがうかがわれます。



六々園春足（『狂歌阿淡百人一首』より）

文化文政期（19世紀前半）の阿波淡路狂歌界の大御所であった春足のもうひとつの顔は、名西郡石井村（現・石井町）の藍商遠藤宇右衛門です。



「かどや日記」より名西郡中島村（現・石井町）での子供浄瑠璃興行や元木林兵衛一座江戸進出の部分



# 展示資料一覽

No.	表 題	年 代	資料番号
<b>なんで、昔、阿波国で藍作が盛んになったんえ？【阿波の藍作】</b>			
1	藍田灌水之図	1843 (天保14) 年	寄託資料
2	明治 22 年度藍大市瑞一金懸板 志摩重三	1890 (明治23) 年	個人蔵
3	武知家家相図	(明治期)	個人蔵
<b>藍の花、見たことあるで？【植物としての藍】</b>			
4	倭 (和) 漢三才図会 (巻第九十四之末・湿草類)	1715 (正徳 5) 年	イノウ 00070
5	葉籠本草	(近世)	徳島県立図書館所蔵
6	本草綱目	1672 (寛文12) 年	フルカ 00340
<b>藍ってどんな作物え？【作物としての藍】</b>			
7	藍農工作之風景略図	1943 (昭和18) 年	石井町教育委員会所蔵
8	藍一覽	1872 (明治 5) 年	岩村家資料
<b>藍はどこで作られたんで？【栽培地域】</b>			
9	藍作地方之図	1940 (昭和15) 年	T617 ニシ
10	中島及近傍村々略図	1940 (昭和15) 年	T617 ニシ
<b>藍作人はごっついしんどい仕事やったって聞くけどホンマなん？【藍作人について】</b>			
11	仕上御請書之覚 (地方藍園村々において 1 日五度の食事を四度に減す)	1837 (天保 8) 年	アヘケ 00037
12	覚 (関東干鰯荷受証)	(幕末期)	カワノ 00086
13	仕渡ス一札之事 (干鰯代金支払滞りに付、元利 4 ヶ年賦にて内済)	1801 (享和元) 年	キノウ 01717
<b>染 (すくも)・藍玉って何なん？【加工について】</b>			
14	存付申上ル覚	1668 (寛文 8) 年	カナツ 02205
15	御尋二付申上覚 (藍砂盗取三名の件)	(近世)	カナイ 00010
16	藍玉・染積出通遣砂共相約指上帳	1866 (慶応 2) 年	ナカサ 00005
17	覚 (洗干砂仕上の件)	1873 (明治 6) 年	ナカサ 00014
<b>藍の商売ってどんな風に行われとったんえ？【藍業について】</b>			
18	藍玉しらへ手板	1865 (慶応元) 年	アマ 200035
19	藍売帳	1834 (天保 5) 年	イノウ 07231
20	繁栄見立鏡	1882 (明治15) 年	岩村家文書
21	泉屋喜市郎書簡	(近世)	ハン 301084
<b>阿波藍商に対して、徳島藩はどんなバックアップをしたんえ？【阿波国と藍商】</b>			
22	藍方御役所拝借願書跡控	1865 (慶応元) 年	イノウ 05667
23	国助書簡	(天保期)	キノウ 01802-1
24	正遣御咎御答簡条書	(文化期)	キノウ 01285
<b>阿波藍の繁栄は、文化にどんな影響を与えたんえ？【藍商の文化貢献】</b>			
25	二番記録 (かどや日記)	1838 (天保 9) 年	モトキ 00002
26	諸控	(近世)	キノウ 00932-2
27	狂歌阿淡百人一首	1832 (天保 3) 年	イワム 00995

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

## 展示解説 担当職員によるやさしい解説

日時 8月23日日・9月22日火祝・  
10月16日金 いずれも13時30分～

会場 文書館 2 階 講座室・展示室

## 第 60 回企画展

### 「藍を作り、藍を売る — 阿波の主産業・藍 —」

令和 2 年 8 月 4 日発行

編集・発行 徳島県立文書館  
〒770-8070  
徳島市八万町向寺山  
電話：088-668-3700

印刷

原田印刷出版株式会社  
〒770-0903  
徳島市西大工町 4-5  
電話：088-622-2356